河岸空間と周辺コミュニティの関係性を再生するための過程に関する研究
—ヴァラナシ(INDIA)におけるDev Diwali祭を事例に—

○橋本慎吾[1]　・　近藤隆二郎[2]

[1] 甲西町教育委員会(〒520-3288　滋賀県甲賀郡甲西町中央1丁目1番地)
[2] 工博　滋賀県立大学助教授　環境科学部(〒522-8533　滋賀県彦根市八坂町2500)

本研究では、宗教と水の関係が密接な関係にあるヒンドゥー教の聖地「ヴァラナシ（Varanasi)」の河岸空間ガート(Ghat)で行われるDev　Diwali祭を対象とし、住民主体の地域環境を再生する可能性を提示することが目的である。Dev　Diwali祭はモハッラ(Mohalla)と呼ばれる周辺コミュニティが中心となり、10年程前から汚染の深刻化したガンジス川(Ganga)を美しくしようというメッセージが伝統的な祭の意味に加えられ、現在はヴァラナシ最大級の祭となっている。そこで先ず住民に対してヒアリング調査を行い、日常におけるガートとモハッラの関係性を明らかにし、Dev　Diwali祭が日常の社会構造に及ぼす影響についてヒアリング調査と祭の現象を基に考察を行った。その結果、この祭には「伝統的仕掛け」と「現代的仕掛け」と呼ぶことのできる、河岸空間と周辺コミュニティの関係性の再生に有用な構造があることを明らかにした。

Key Words: *community environment, reconstruction, Ghat (Symbolic river space), Mohalla (Surrounding community), Dev Diwali festival, Traditional-Device, Modern-Device*

1. 研究の背景と目的

20世紀後半以降の開発による環境破壊は、人間と自然環境との共生バランスや環境システムの崩壊をもたらし、人間の存在と環境の間に無視することのできない不適合を発生させた。このような状況に対し、近年、環境の修復や保全・管理のための政策が推進されてきているが、未だに解消されたという状況には至ってはいない。その原因として、国やその土地などによって、環境保全の概念や、環境に対する意見が異なることなどが考えられるだろう。

そのような状況の中で、地域環境の再生という言葉がしばしば聞かれるようになってきている。そして地域環境の再生のためには「オールタナティブ(alternative)な手法としての手法、仕掛け、制度づくり、理念をどう構築するか」[1]という課題がみえてくる。この課題に対処する方法として、「人間と環境との相互作用の中で得られる環境との上手なかかわり方を可能とする能力」としての「環境的スキル(environmental　skill)」[2]というものの必要性が挙げられている。また、近年、混沌や有機的といった表現がなされるアジア都市には、しばしば古からの独自の環境観に基づいた、陰陽や風水に代表されるコスモロジーによるエコロジーの思想が環境文化として内在していた。すなわち多くのアジア都市は、伝統的社会において、環境と人間の関係性が、儀礼や習慣などの「**民俗の智**」ともいうべきものとして存在していたのである。

本研究では、まず宗教と水とが密接な関係にある、ヒンドゥー教の聖地、インドの「ヴァラナシ(Varanasi)」を研究対象地とし、Dev　Diwali祭という祭の構造を明らかにする。そして祭に顕在化する「民俗の智」を基に、河岸空間と周辺コミュニティの関係性、つまり環境と人間の関係性を、住民が中心になり再生を図る一つの方法の可能性を提示する事を目的としている。

2. 研究対象と研究方法

(1) 聖都「ヴァラナシ(Varanasi)」

ヴァラナシは北緯25度18分、東経83度1分、インド北部ガンジス川中流域にガンジス川が三日月状の流れを形成する西岸にのみ都市が形成されている。抒情詩マハーバーラタにも登場するほど歴史は古く、インド国内外から観光客、巡礼者が集まり、イスラム教のメッカ、キリスト教のエルサレムにも例えられるヒンドゥー教一最大の聖地である。

(2) 河岸空間「ガート(Ghat)」

聖川ガンジス川の東岸6.4kmに設けられた階段状の

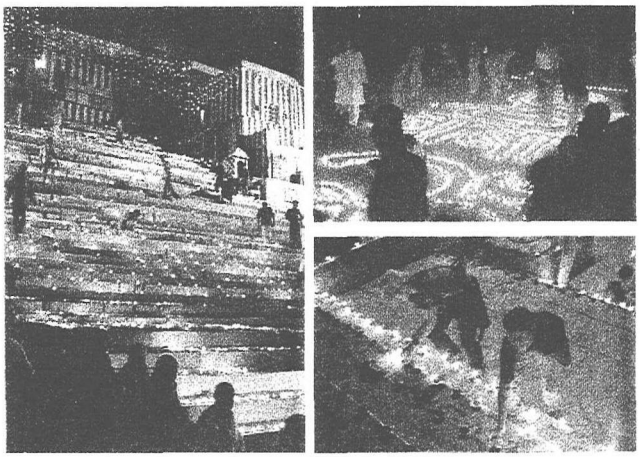


図-1 Dev Diwali 祭の情景(2001.11)

施設のことである。ヒンディー教の聖地の原初的形態ともいわれ、早朝、多くの巡礼者が朝日に向かって沐浴する姿はあまりにも有名である。

(3)周辺コミュニティ「モハッラ(Mohalla)」

ヴァラナシ最小の社会組織、地域コミュニティの総称をさす。モハッラとは「共通の民俗的あるいは社会的・文化的・部族的背景を持った人々による居住区域の単位を意味する、イスラム圏で広く使われている言葉」である。本研究では、ガートに隣接するモハッラを周辺コミュニティとする。

(4)祭「Dev Diwali祭」

ディアと呼ばれるオイルランプをガートに飾り付ける祭のことで、元来はカルティカ・プルニマ(Karttika Purnima)と呼ばれ、ヒンドゥー暦のカルティカ(Karttika)月(日本の 9 月～ 10 月頃に当たる)の満月(Purnima)にパンチャガンガーガート(Panchaganga Ghat)で行われていた小さな祭であった。10 年程前から大規模になり、現在はヴァラナシ最大の祭の一つになっている(図-1)。

(5)研究方法

本研究では、ヴァラナシの河岸空間と周辺コミュニティの関係性(社会構造)をまず日常について明らかにし、Dev Diwali祭という非日常の変化について明らかにする。調査は2000年10月-11月、及び2001年11月-12月にヒアリング調査をヴァラナシにて実施した。

まず、日常の関係性は、1.モハッラの構成について分析、2.それが人々に与える影響の分析、3.その影響下で人々がガートに対してとる行動を分析することで明らかにした。また、非日常の関係性については、Dev Diwali 祭という祭を通じて、環境と人間を結びつける役割を果たすものを「**伝統的仕掛け**」、意味付けの拡張がみられる部分を「**現代的仕掛け**」と位置付け、それぞれ仕掛けについて構造を明らかにする。そして Dev Diwali 祭という非日常性が日常に与える効果から、住民が中心になり環境と人間の関係性の再生を図るための、祭の可能性を探る。

3. 日常における河岸空間と周辺コミュニティの関係性についての分析

ここでは以下の理由から、図-2 に示したダルマクープと呼ばれる地区においてヒアリング調査を実施した。

① ヒンドゥー教徒の信仰のシンボルであり、巡礼、観光の主目的であるヴィシュヴェシュヴァラベシュヴァラ寺院が隣接地区にあり、社会構造に対する宗教の影響がヴァラナシの中で最も大きいと推測できる地区であること。

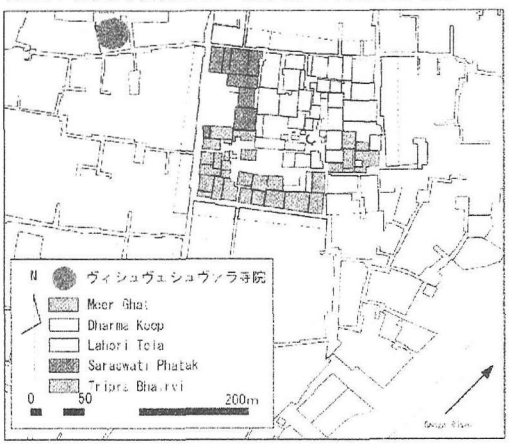
② 歴史的に早くから都市化された地区であるため、街区パターンが残っている。そのため地域コミュニティであるモハッラの特徴が明確である[3]。

③ ガートに近いため、日常に人々がガートに対して取る行動のデータが得られる。

質問項目は、以下の通りとした。

1.所属モハッラ名
2.出身地
3.職業
4.日常の社会生活で使用するガート名
5.使用頻度
6.使用目的

調査地区には住民の居住が確認できた建物が全 71 軒あり、各質問項目において約 90 %の回答をえた。



図ー2 ダルマクープ地区の住民の所属モハッラ

表−1　ダルマクープ地区住民の使用するガート

		日常使用ガート									
		Meer	Lalita	Manikarnik	Tripra	Scindia	その他	複数	不明	拒否	合計
所属モハッラ	ミールガート	14	0	0	0	0	0	1	2	1	18
	ダルマクープ	14	0	0	0	0	1	0	0	0	15
	ラホーリトーラ	5	7	3	0	0	0	1	2	2	19
	サラスパティパタック	2	0	1	0	1	0	3	0	0	7
	トリプラバイルビ	5	0	1	1	0	0	2	1	0	10
	合計	41	7	5	1	1	1	7	5	3	71

(1)モハッラの構成

モハッラの名称には「創設者の名前(当時の支配者)、居住者の民族・カースト名、モハッラの守護神・寺院、井戸、かつてそこに存在した池(ここでの池とは、主にヒンドゥー教において宗教的に重要な施設としての kund を指していると思われる)[4]、ガートの名称、伝説・歴史上の故事などに由来」[5]している。総じてモハッラにはヒンドゥー教の影響を窺い知る事ができる。また川沿いの市街一体において、モハッラの成立した時代、既に街路が発達していた場所では街路を軸としてモハッラが形成されたようである[6]。

ヒアリング調査を行ったダルマクープ地区では、図-2に示したとおり、五つのモハッラが集まった街区であることがわかった。

モハッラにはそれを構成する要素としてガート、住民の出身地(街路)、伝説に残る建造物(シンボルとなる井戸や祠)を挙げることができる。これら、要素が住民のコミュニティを形成するための規定する要素となっている。

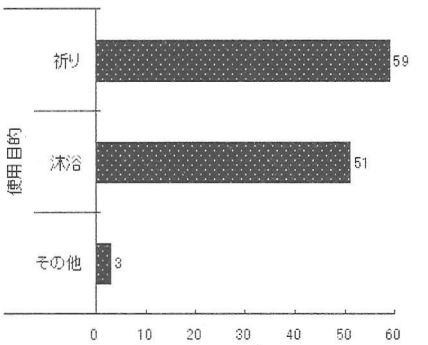
(2)ガートでの行動分析

ダルマクープ地区における各モハッラ住民が使用するガート、ガートでの行為、及びその頻度から住民のガートでの行動を分析する。

a)使用するガートから見る河岸空間と住民の関係性

表-1は調査地区内の住民が使用するガートについてモハッラ毎に集計したものである。

ミールガート、ダルマクープにおいて使用しているガートは「Meer Ghat」モハッラ内で共通していることがわかった。これは物理的な理由として最も近いガートを利用しているためであり、そして「ガートへの導線に当たる街路」の為だと考えられる。また、ガートがモハッラの住民に対して与えている影響という側面からみてみると、構成要素、物理的要素を考えるとミールガート、ダルマクープの両モハッラは Meer Ghat の影響が強いモハッラであると考えられる。つまり、人々にとっては、それら要素から「地元のガート」として Meer Ghat を使用するように関係性が規定されているのである。しかしこの街路からは離れたラホーリトーラ、サラスパティパタックなどのモハッラでは日常に使用するガートとして「Manikarnika Ghat」を挙げている。Manikarnika Ghat は Meer Ghat へ行くよりも物理的な距離は遠くなるが、人々は Meer Ghat には行かず、Manikarnika Ghat へ行くのである。これには 84 あるとされるガートの中でも、特に聖性の高い五大ガートの一つである Manikarnika Ghat のもつ非常に高い聖地性の影響が、距離的には近い Meer Ghat などの他のガートよりも、この街区にまで及んでいると考えられる。



図−3　ガートの使用目的集計(有効回答 64,複数回答あり)

つまり、Meer Ghat のようなガートは非常にローカルなものであり、使用する人々は近隣の住民に限定される。逆に Manikarnika Ghat のようなガートはローカルなガートとは違い、近隣の住民はもとより、ヒンドゥー教徒すべてのためのガートであり、誰もが使用するガートとして開かれたものだといえる。

b)ガートでの行動における行動の分析

ガートの使用目的に対して、回答の得られた 64 人(71 軒中:拒否 3・不明 4、複数回答あり)の結果をまとめたものが図-3 である。

先ず、ガートに人々が行く最大の目的は 59 人 92 %が「祈り」であり、日常の行動にヴァラナシの聖地性の現れと見ることができるだろう。

また「祈り」が目的であると答えた 59 人のうち、複数回答として「沐浴」と答えた人は 46 人 78 %であった。「祈り」+「沐浴」+「その他」と答えた人を合わせると、80 %にもなる。

ガートへ行く目的が「沐浴」としている人は 59 人中 51 人、80 %であった。これもまた、「祈り」と同じように聖地性の表象であろう。また目的が「沐浴」と答えた人 51 人中 46 人、90 %の人が「祈り」とも答えている(沐浴のみという人が 5 人)。「沐浴」を目的でガートに行く人たちほと

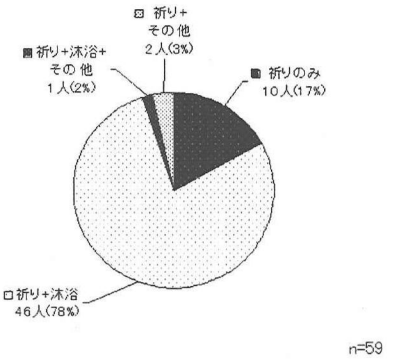


図-4　目的「祈り」のうちわけ

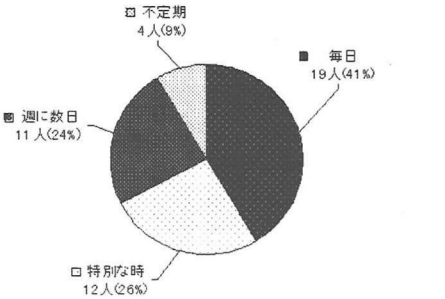


図-5　ガートの使用頻度

んどが、同時に「祈り」を目的にしているといえる(図-4)。そして使用目的として「祈り」と「沐浴」と回答した住民はモハッラ別で総じて 60 %を越えている。「祈り」、もしくは「沐浴」のどちらかを挙げた住民は、100 %(64/64)であった。

以上、まとめるとガートでの周辺住民の行動は主に「祈り」と「沐浴」ということに集約できる。

また、目的が「祈り」と「沐浴」である人たちの、使用頻度については「毎日」と答えた人が 46 人中 19 人で 40 %、「週に数日」と答えた人が 46 人中 11 人 23 %であった。また、「特別な時」と答えた人が 59 人中 12 人で、「不定期」と答えた人が 19 中 4 人であった。「毎日」、「週に数日」を合わせると実に 63 %の人が頻繁にガートに行くことになる(図-5)。

ガートに行くという行為は、自らの信仰に起因しており、ヴァナラシの住民にとってそれが日常生活の一部であり、日常行為の場としてガートが人々に認識されていると考えられるだろう。観光客、巡礼者にとって非常に特別で神聖な場所であるはずのガートも、地元住民にとっては日常行為の場となっているのである。

4. 非日常におけるヴァラナシの社会構造の分析

(1) Dev Diwali 祭における「伝統的仕掛け」と「現代的仕掛け」

Dev Diwali 祭がヴァラナシの日常の社会構造に対し与えている影響を明らかにするため、本来 Dev Diwali 祭にあった部分を「伝統的な仕掛け」、拡張された部分を「現代的な仕掛け」とする。また、祭の開催に際して、重要な役割を果たす「サミティ Samiti 」という自治(会)組織の働きに着目する。この組織はモハッラを単位として、伝統的・現代的仕掛けをオーガナイズする組織である。

「伝統的な仕掛け」、「現代的な仕掛け」共に、サミティを中心に現地フィールドワークによる祭の観察記録、ヒアリング調査をもとに明らかにする。

調査範囲はダルマクープ地区の住民が使用するガートをすべて含む図-6 に示したガートを対象とした。

(2) 伝統的仕掛けの解明

祭と宗教を一つの手がかりとして、現代社会へのアプローチを試みている芦田は祭を「同一の社会集団のメンバーがある限定された(つまり『非日常』的な)時間と場所で一堂に会し、『身内』または『仲間』としてのお互いの『同一化』をとおして、『共同性』を(再)確認するための社会的・文化的な仕掛けの一つといってよい」[7]と定義している。そして神を人のそばに引き寄せ、神と人が一緒になって楽しみ、メンバーの一体感を高める「祝祭性」、神と人の間にある一線によって、神すなわち社会集団そのものへの畏敬の念を表現する「儀礼性」という二つの表裏一体の性質が祭にはあるとしている。

ここでは芦田の定義を元に、Dev Diwali 祭の伝統的仕掛けを明らかにする。

a) オイルランプの果たす役割

Dev Diwali 祭においては、オイルランプは非常に重要な装置のである。住民にとってオイルランプを飾り付けて点火することによって、Dev Diwali 祭に参加するということが、<神の存在を意識する>というを意味している。デュルケムの言う聖俗循環(分類モデル)の聖なる時と俗なる時の規則的な交代」[8]のポイントということができる。人々はオイルランプ=祝祭性という装置によってヴァラナシのコスモロジーという共有イメージを持つこととなり(呼び覚まされる)、非日常= Dev Diwali 祭に大勢の人々が集う要因となっているのである。

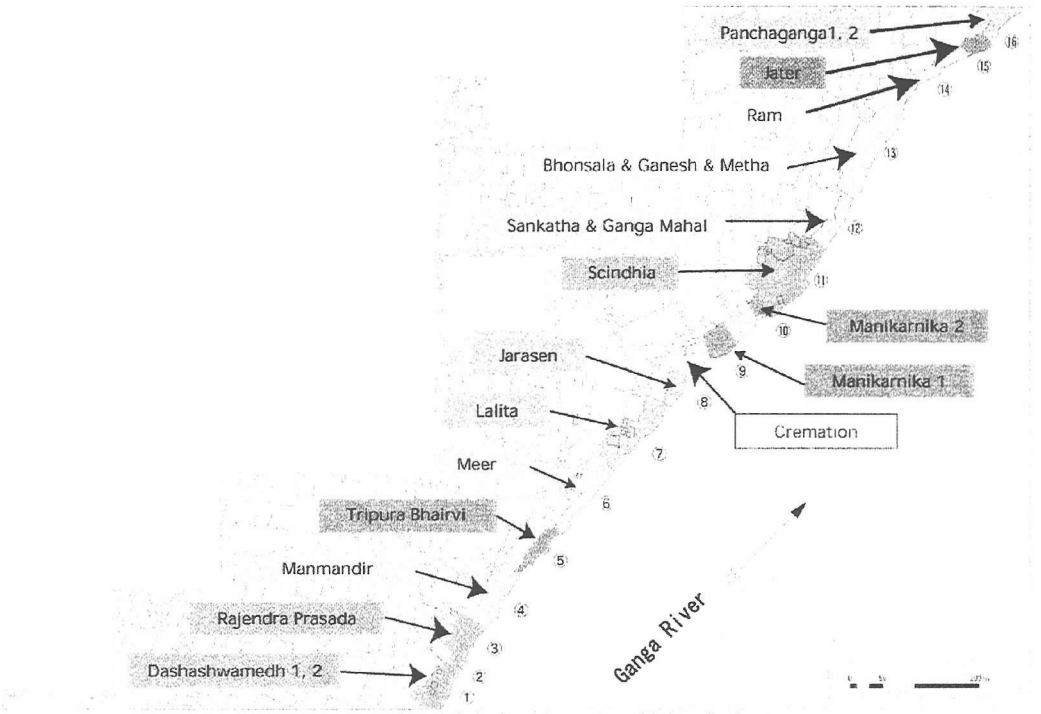


図-6 Dev Diwali 祭の記録観察及びヒアリングを行ったガート

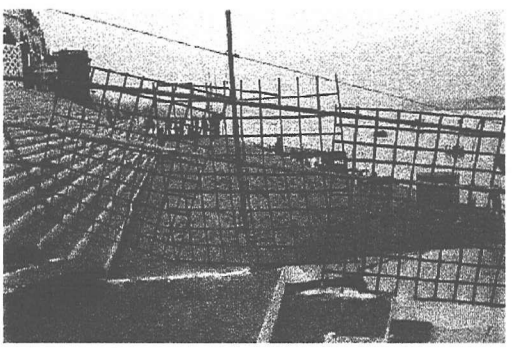


図-7 「競い」の意識の一例（マニカルニカガート）

b)「個」—「中間集団」—「総」へのアイデンティティの変化

図-7 は各ガートで行われる飾り付け行為によって、生まれる「競い」の意識が現象化したものである。このように、ガートとガートの境界には竹の柵などで、隣接するガートとの飾り付けに対して、差別化を図ろうとしている。この意識で自己の帰属意識が高まることとなり、より身近な集団(モハッラ)=中間集団を認識する。また、ガンジス川(公)、ガート(共)、モハッラ(私)という空間が、祭の開催されている間は(私)空間の広がり「ガート=モハッラ」という関係性を作り出す。モハッラの住人であるというアイデンティティを確認する。モハッラとは地域コミュニティという社会集団であるが、ここではコミュニティの構成員である住民の所属を表し、アイデンティティを示す限定的な空間と言う意味で,(共)空間に相対的な概念として(私)空間とした。

しかし、飾り付けという段階で各ガートが持つ「競い」の意識は、祭が進行し、オイルランプの点火されることによってヴァラナシにおけるコスモロジーの共有イメージがもたらされるとともに、祭を見に来る観光客の影響で「観光客」⇔「地元民」という二項対立概念の明確化という、段階を経過することによって、より上位レベルで解消され「われわれ」という「身内・仲間」意識の中で統合されることになる。

つまり、個人より始まった祭への参加が、中間集団=モハッラとしてアイデンティティを確認するという過程を得て、「総体」=ヴァラナシの住民としてのアイデンティティを形成しているといえるだろう。また、「個－中間－総」という、時間の経過に伴った、ガートの飾り付けが行われ、オイルランプに火が点され、観光客によって見られるというイベントの進行と共に、意識レベルの上昇があり、そこには各意識レベルが重層化されている構造があるといえる(図-8)。

(3) 現代的仕掛けの解明

「伝統的仕掛け」とは、文化・伝統によって受け継がれてきたものを元にしたものであり、それを取り入れることで、Dev Diwali 祭によって住民がヴァラナシの住民で

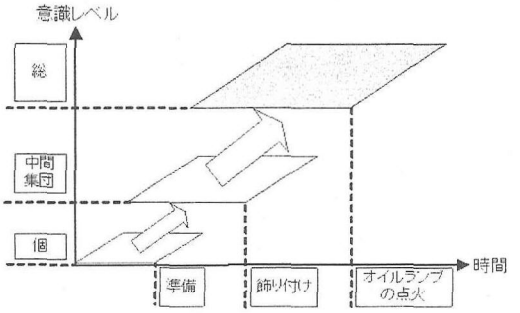


図-8 Dev Diwali 祭における時間経過と意識レベルの変化

あるということを確認するという構造を作り上げている事を明らかにした。Dev Diwali 祭は本来、一つのガートで行われていた小さな祭であり、それが現状で述べたような大きな祭になったことは、この「伝統的仕掛け」が仕掛けられた効果だといえる。しかし、14 、5 年前に始まり、現在の体裁を取るようになってからは 10 年程度しか経過していない。そして近年、この祭には「ガンジス川をきれいにしよう」というメッセージが込められるようになり、祭りの意味付けを拡張している。この現代的な問題意識は、伝統的に続けられてきた祭には決して見ることのないものである。つまり、ヴァラナシの住民に「聖川ガンジス」との宗教的な関係性に、「水環境としてのガンジス」との関係性を加えることによって地域環境を再生しようとしているのである。

a)サミティの役割

「伝統的・現代的仕掛け」の存在する Dev Diwali 祭では、自治(会)組織にあたるサミティが大きな役割を果たしている。各ガートに対して、一つないし二つのサミティが中心となって、準備の段階から祭を運営している。サミティは個々が別々に機能しているわけではなく、事前に各サミティの代表者が集まり、数回の会議を開催していることが分かった。そしてこの会議を主催しているのが「KENDRIYA DEV DEEPAWALI MAHA SAMITI KASHI」というサミティの代表が集まって、Dev Diwali 祭のために結成している組織である(以下、ケンドゥーリとする)。Dev Diwali 祭はケンドゥーリを頂点として、その下に各サミティが連なるという組織体系によって、ヴァラナシの住民が中心になって開催されている祭ということが分かる。

b)環境美化への呼びかけ

ヴァラナシは 10 月になると 4 ヶ月続いた長く鬱陶しい雨季が明け、移行期を経て、乾季へと向かう。乾季に入ると、ガンジス川の水位が低下し始め、雨季の間、川に沈んでいたガートの下段部は土砂が堆積した姿を現す。そしてこの頃を境に、州政府によりガートに堆積した土砂を取り除く作業が始められ、ガート全体が放水によって清掃される(図-9)。ガートは雨季が明けて、ヒンドゥーの暦の上で新年を迎えるこの時期に、ガンジス川の水位の低下とともに一年で最も美しい状態になる。

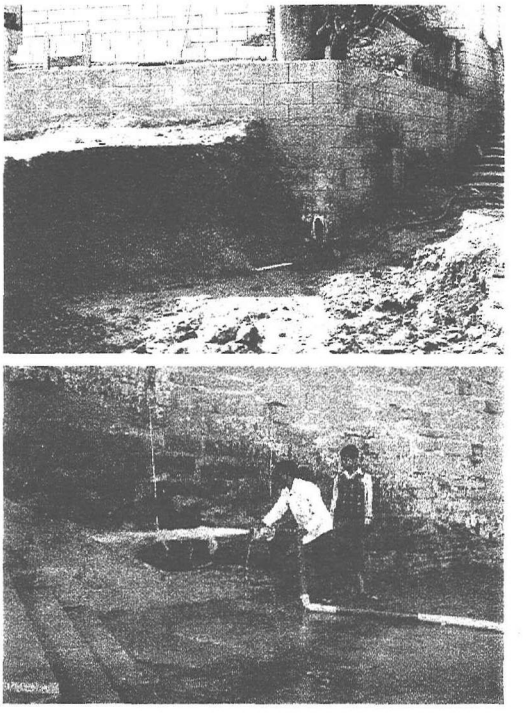


図-9 ガートの土砂を洗い流す風景

図-10 ガートに設置された横断幕の一例

そして、祭の一週間程前になるとガートの至る所に、人々にガートの環境美化を促すためのメッセージが書かれた横断幕が、ケンドゥーリによって設置されるようになる。図-10 には「ガートに暗いところがないように、みんなで集まってディア(オイルランプ)を点そう」、「ガンガーを、インドをきれいにしよう!」、「KENDRIYA DEV DEEPAWALI MAHA SAMITI KASHI」、「ガンガーの保護、美しいガートを!」というメッセージが書かれている。

最終段階として Dev Diwali 祭で飾り付けをという行

図-11　サミティ代表者の会議の様子

為を通じて、ガンジス川を、そしてガートをきれいにするという統一したコンセプトを共有することを確認するための準備として、確認作業としてサミティの代表が集合して会議を開催する。

2001 年度の調査では祭直前の日曜日(11 月 25 日日曜日)にパンチャガンガーガートで行われた最終会議に参加することができた(図-11)。

この会議の内容はまとめると以下の二点であった。

①各ガートを飾り付けるサミティの代表者が、北から順に、祭の準備に際して発生している問題を発表する。ここで、発表される問題とは、資金不足が主因となって発生している問題である(例:ガートの修復が出来ない。ガートの衛生状況が悪いが改善されない、など)。そしてその住民にできる解決方法を探る。

②話し合われている問題は基本的に州政府によって解決されるべき問題が多いため、各ガート代表個人、もしくはサミティ単体で対州政府と交渉するのではなく、もう一段上位組織であるケンドゥーリとして、交渉できるように要望をまとめ、州政府を動かそうとする意思を確認する。

この会議で最も強調されているのは、Dev Diwali 祭が州政府主導ではなく、ヴァラナシの住民主体で運営しているという点である。そのため、州政府との対立姿勢は明確に現れていた。また、これは彼らがヴァラナシの住民であるというアイデンティティの現れであり、自分達の街はきれいにするのは当然だという思いを芽生えさせる、もしくは再確認する。そしてインド、世界でもまれに見る聖地であるという自負も見られた。そのため、サミティの代表達は街の環境を改善しようと、ケンドゥーリという組織をつくり、Dev Diwali 祭によってヴァラナシの住民に「現代的仕掛け」を仕掛けているという構図が出来ているのである。このことは、住民の意識の中にある宗教的な聖地性に起因しつつ、ガンジス川やガートとの関係性に「環境美化」という新たな関係性を持たせることになり、より強固な「モハッラ(住民)」-「ガート」-「ガンジス川」の関係性を形成させている。

5. 結論

本来、ヴァラナシには「ヴァラナシの住民」-「ガート」-「ガンジス川」の関係性と、「巡礼者」-「ガート」-「ガンジス川」の関係性が存在する。ヴァラナシの住民にとってガートやガンジス川は日常の生活の場であると同時に、信仰の場である。巡礼者にとっては特別な場所でありヴァラナシの持つ cosmic や spiritual といった聖地性によって築かれている関係性である。

これに対し、Dev Diwali 祭を運営するサミティの「伝統的仕掛け」によって、「外的視点」がもたらされる。つまり住民はガートを飾り付け、オイルランプの点火を行う。このことによりガートは非常に幻想的な光景を生み出し、その現象によって多くの観光客が訪れる結果につながっている。このことがヴァラナシの住民にとり、外部者である観光客によって「見られる」という意識を生み出すことになる。

この伝統的仕掛けによってもたらされた「外的視点」の効果に加え、「現代的仕掛け」によって「内的視点」がもたらされる。「内的視点」とは住民みずからが「ガート」「ガンジス川」との関係性を見つめることである。Dev Diwali 祭が行われる前には、サミティの代表が集まり、会議を開催する。そこではガート、ガンジス川の「清掃美化」という意識を確認する。こういった住民による動きは、それまで聖地性によって関係付けられていた「ヴァラナシの住民」と「ガート」「ガンジス川」の関係性をより一層強固なものとするのである(図-12)。

Dev Diwali 祭はサミティという、住民による自治組織が運営することによって成功を収めている祭だということができる。住民がヴァラナシという都市の持つ特質を理解

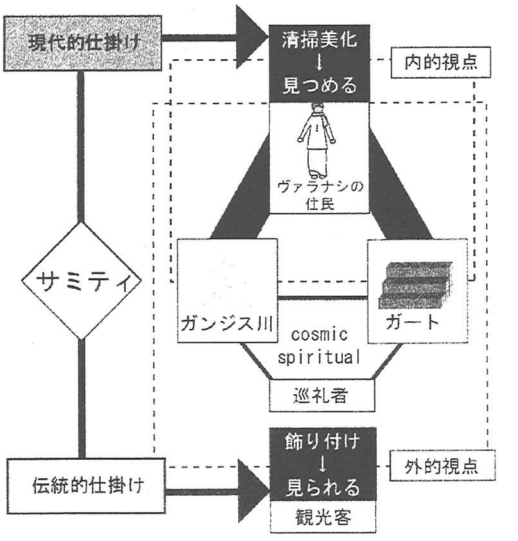


図-12　Dev Diwali 祭の構図

し、巧みに Dev　Diwali 祭に取り入れることによって、住民達は自分達の都市で起こっている環境美化という問題、そして自分たちの果たせる役割を発見していた。

Dev　Diwali 祭は、祭の持つ非日常性のもとで、住民が中心になり、環境と人間の関係性の再生を図る一つの方法としての可能性を示していると考えられるであろう。

謝辞:現地調査に関して有益な御助言をいただいた人間文化学部生活文化学科山根周助手に深く謝意を表します。2000 年度の現地調査では、京都大学大学院工学研究科博士後期課程柳沢究氏にお世話になりました。また、2001 年度の調査では、ベナレス・ヒンドゥー大学（BHU）文学部外国語学科講師の杉本昭男氏に大変お世話になりました。深く謝意を表します。快くヒアリング調査に応じてくださったダルマクープ地区の住民の方々、サミティのリーダの方々に心より感謝いたします。

参考文献

1) 長谷川公一:特集　地域環境再生の社会学,環境社会学研究, 5 , p4 ,環境社会学会(1999)
2) 近藤隆二郎:環境イメージの発達過程にける役割行為の意義と効果に関する研究, p22 ,大阪大学大学院工学研究科博士課程学位論文(1994)
3) 柳沢究:ヴァラナシ(インド)の都市空間構成原理に関する研究,第 3 章 3 節,京都大学大学院工学研究科修士論文(2000)
4) Daiana L. Eck : *Banaras City of Light* , p50・373 , Penguin Books India (1983)
5)柳沢究:ヴァラナシ(インド)の都市空間構成原理に関する研究,第 3 章 3 節,京都大学大学院工学研究科修士論文(2000)
6) 柳沢:前掲書,第 3 章 3 節
7) 芦田哲郎:祭と現代社会　序説,熊本大学教養学部紀要人文・社会科学篇, pp36-37(1990)
8) デュルケム:宗教生活の原初形態　下巻, p208 ,岩波文庫(1975)

Process of reconstruction based on relationship between symbolic riverbank space and its surrounding community
－A case of ‘THE DEV DIWALI’ Festival in Varanasi (INDIA)－

Shingo HASHIMOTO and Ryujiro KONDO

Varanasi, a holy place of Hindu, has a close relationship between the religion and water. The purpose of this study is to propose a method to reconstruct the relationship between the human and environment for the modern time based on the relationship between the symbolic riverbank space and its surrounding community through the Dev Diwali festival. Dev Diwali Festival is the largest festival in Varanasi today. The surrounding community called Mohalla is the center of this festival. In addition to traditional meanings of this festival, it includes a message to improve the current situation of Ganga since it has been severely polluted for the past ten years.

In this study, a hearing research was conducted to the residents in order to define the relationship between Ghat and Mohalla in daily life, and the influence of Dev Diwali Festival on the structure of Mohalla society was studied based on the hearing research and phenomenon observed during the festival. As the result, it was found that there is a structure called the traditional device and modern device that can be useful for the reconstruction of the relationship between the symbolic riverbank space and its surrounding community.